

【ご参考資料】

中国人民元の切り下げについて

ポイント1 人民元の基準値を前日比2%近く引き下げ

8月11日、中国人民銀行(中央銀行)は、各営業日ごとに設定する人民元の対米ドル中心レートである基準値を前日比2%近く引き下げました。突然の基準値の大幅な引き下げは、市場では驚きをもって受け止められ、人民元の対米ドルレートは一時約3年ぶりの安値水準に急落しました。

同中銀は、市場の実勢をより適切に反映するため、基準値の算出方法を変更すると発表、人民元の事実上の切り下げに踏み切りました。

ポイント2 低迷する輸出競争力の回復を目指した措置

今回の措置について市場では、低迷する中国の輸出競争力の回復を目指したものと受け止めています。

米国の量的金融緩和終了・利上げ観測の高まりなどを背景に米ドルが上昇するなか、それに連動する形で、人民元の実効為替レートもここ数年で大幅に切り上がりました。

人民元高は中国の輸出競争力を圧迫、足元の輸出不振を招いていました。8月8日に発表された7月の輸出額(米ドルベース)は、前年同月比-8.3%と市場予想以上の大幅な落ち込みとなりました。

経済の減速感が強まるなか、その一因ともなっている低迷する輸出を挺入れし、景気を刺激する狙いがあるものと見られます。

ポイント3 今後の当局のスタンスに注目

同中銀は声明で、今回の基準値の大幅引き下げについて、1度限りの調整だとしたうえで、人民元レートを「妥当」な水準で安定的に維持し、基準値の設定で市場の役割を強化する方針だと付け加えました。

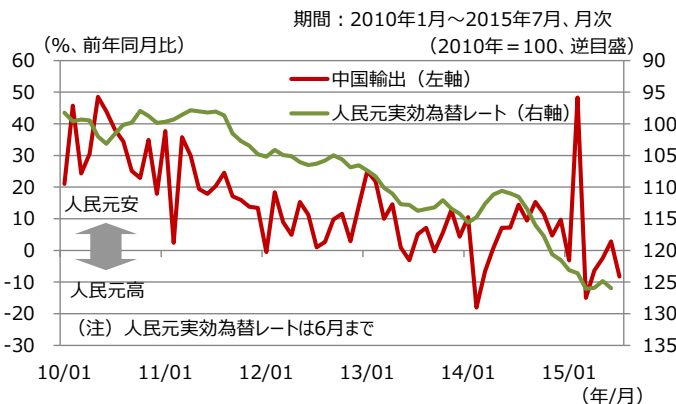
今回の措置により、世界第2位の規模を誇る中国経済が持ち直すのであれば、世界経済にとってもメリットは大きいと考えられます。ただ、今後、中国が明確な通貨安戦略を打ち出してくるのではないかと懸念も市場では燻っており、基準値設定の方向感など、今後の当局のスタンスに注目が集まります。

【図1】2000年以降の人民元を取り巻く主な動き

2005年7月	固定相場制(ドルペッグ制)から通貨バスケット制を参考とした管理変動相場制へ移行
2008年7月	世界金融危機などを背景に事実上のドルペッグ制へ復帰
2010年6月	管理変動相場制へ再移行
2012年4月	対米ドルの1日の変動幅を基準値の±0.5%から±1.0%へ拡大
2014年3月	対米ドルの1日の変動幅を基準値の±1.0%から±2.0%へ拡大
2015年8月	基準値を前日比約2%切り下げ

(出所) 各種報道等より野村アセットマネジメント作成

【図2】中国輸出と人民元実効為替レートの推移



(出所) BIS(国際決済銀行)、Bloombergデータより野村アセットマネジメント作成

【図3】為替レートの推移



(出所) Bloombergデータより野村アセットマネジメント作成